

太吉と地蔵

うめながゆうじ

昔、昔、東北の小さな村に太吉という子どもが住んでいました。この太吉は物をいう時、どもってしまい、村の仲間からは「*どいどい*」(ども)りの太吉」といわれ、遊び仲間にいれてもらえず、いつも一人で遊んでいました。

しかし、太吉にも、たった一人だけ友だちがいたので。村の鎮守様に祭ってあるお地蔵さんが、たった一人の友だちでした。村の仲間がみんなして遊んでいるときはいつも、一人でこの鎮守様にやってくるのは、物いわぬお地蔵さんに話

しかけるのでした。

「お、お、お地蔵さん。きよ、今日は、な、な、何してあそぶだ。お、お、おいらの、た、た、宝物を見せてやろうか。」

と独り言をいいながら、来る日も来る日もお地蔵さんと遊ぶ太吉でした。

太吉は吃りでしたが、とても優しい子で、山から取ってきたあけびやざくろをいつもお地蔵さんにお供えし、また、赤いよだれ掛けを洗ってあげたり、鎮守様の掃除をするのは毎日のことでした。

ところがある日、村の仲間に「吃りの太吉やーい、ど、ど、吃りの太吉やーい。」

とからかわれ、いつものように鎮守様のところへやってきた日のことです。

「お、お、おいら、ど、ど、どうして、う、う、うまく喋れないだべ。お、お、お地蔵さん、な、な、なんでおいらだけ、しゃ、しゃ、しゃべれねえんだ！」

この日ばかりは、いつも我慢していた日頃のうつくつした気持ちが一挙に吹き出し、泣きながら地蔵に話かけるのでした。泣いて泣き疲れて、いつの間にか太吉は鎮守様の中で眠ってしまいました。

太吉が眠ってしばらくすると、何処からか太吉を呼ぶ声が聞こえてきます。

「太吉や、これ太吉や。」
目を覚ますとそこには誰もいません。鎮

守様の中から外を見ても誰がいる様子もなく、不思議に思っていると、また何処からともなく、

「太吉や、太吉や。」
と声が聞こえてきます。ふと振り返ると、そこにはあの地蔵以外にも見当たりません。

不思議そうな目をして辺りをきよきよきよ見回していると、

「太吉や、わしじや、おまえの目の前に立っている、ほれ、この地蔵じや。」
驚いた太吉は目をまん丸くして地蔵のそばへ行き、

「お、お、お地蔵さんかえ、お、お、おいらの名前を呼んだのは。」

「そうじや、わしじや。」
物心ついてから、もう何年も一緒に遊んでいる地蔵が生まれて初めて喋ったのです。太吉は驚きとともになんだか嬉しくなってきました。

「太吉や、おまえは本当によい子じや、このわしの面倒もよくみてくれた。ほんとうによい子じや、そのおまえの優しさに対して一つだけ願いをかなえてあげよう。さあ、おまえの願いは何じやな。」
「ほ、ほ、本当かい。ほ、ほ、本当に、お、お、おいらのために、い、い、今まで、だ、だ、誰も相手にしてくれなかった。こ、こ、このど、ど、吃りをな、な、なおしてください、お、お、お地蔵様！」

「そうか、わかった。その願いを叶えてあげよう。だが、いいか太吉や。吃りを治してやる代わりに、一つだけ約束してもらわねばならんことがある。いいかな太吉。」

「お、お、おいら、ど、ど、吃りが治るなら、ど、どんなことでもやるよ。」
「そうか。よし、その約束というのはじゃな、吃りが治って喋れるようになる

代わりに、決して嘘をついてはならんということじや。嘘をつかない限り、おまえの吃りは治ってはいるが、もし一度でも嘘をつこうものなら、そのときからおまえは、ものと吃りに戻ってしまうぞ！いいか！決して嘘をついてはならんぞ。」

「太吉やーい、太吉やーい。」
遠くの方でおとうとおかあの呼ぶ声が聞こえてきます。ふと目を覚ますと、鎮守様の中で眠り込んでいたことに気づいた太吉は、夜になっても帰ってこない太吉を心配したおとうとおかあが探し回っていたのでした。

「おとう、おかあ、おいらここだ、ここだ！」
鎮守様の中から勢いよく飛び出して行った太吉は、自分の言葉が吃らずに言えた

ことに驚きました。そして、おとうとお
かあも驚き、

「どうしただ、太吉。おめえ吃つてねえ
だな。吃つてねえだな。」

おとうもおかあもいまにも泣きそうな顔
をして、喜び合っていました。

吃りの治った太吉は、仲間からも次第
に遊んでもらえるようになり、毎日元氣
に暮らしていました。

優しい太吉はお地藏さんに対しても、
毎日の掃除をしてあげたり、山の果物を
取ってきてはお供えすることを怠ったり
しませんでしたが、あれ以来一度もお地
蔵さんは太吉に話しかけませんでした。

ある日、太吉が村の庄屋の息子の斉六
と遊んでいるときのことでした。庄屋の
広い庭で、お侍ごっこをして遊んでいる
うち、斉六と太吉は、勢い余って庄屋の

大切にしている壺の置いてある部屋へ
入ってしまいました。

「太吉、いくぞ！」

「おお、こい！」

とはしやぎまわっているとき、斉六が振
り回した棒が大事な壺に当たってしまい
ました。

「ガチャン！」

大きな音とともに大事な壺は粉々に壊れ
てしまい、太吉と斉六は壊れた壺の前で
ただ果然と立ち尽くすばかりでした。

物音とともに駆けつけてきた庄屋は、
壊れた壺とそこに立ち尽くしている息子
と太吉を見て、

「誰がやったんだ！」

「……………」

「誰が壊したと聞いているんだ！」

庄屋のあまりにもすごい剣幕のため、
斉六は震え上がってしまい、自分がやっ
たのだとは言い出せずにいました。

太吉は考えました。なぜ斉六は自分

やっていたいわないんだろう。そうだ、庄屋
様がこわいんだべ。ならおいらがやった
ことにすればいい。そうだ、それがいい。

おいらの大切な友だちだ、その友だちの
ためだったら、おいらが身代わりになっ
たつてかまわねえ。でも、そうすると、
嘘をついたことになってしまう。嘘をつ
くとまたもとの吃りに戻ってしまう。吃
りに戻ったら、またみんなおいらと遊ん
ではくれねえだろう。どうすりゃいいん
だべ、吃りには戻りたくねえし、だども
せつかく友だちになれた斉六のためにな
んとかしてやりてえし、どうすればいい
んだべ。

そうこう悩んでいるうち、追い打ちを
かけるように庄屋の怒りの声が響きます。

「誰がやったんだ！ 斉六か、それとも太
吉か！」

「はい、おいらがやりました。」

太吉は斉六の今にも泣き出しそうな顔を
見て、とうとう我慢がしきれず、斉六の
身代わりとなって嘘をついてしまったの
です。

「そうか、太吉か、おまえがやったんだ
な。」

「はい、おいらがやりました。」

斉六は、目に涙をいっぱい浮かべて
太吉を見えています。太吉は淋しそうな表
情を浮かべながらも、なぜだか満足して
いました。

「ああ、とうとうおいら嘘をついちゃっ
ただ。あれだけお地藏さんにいわれてい
たのに、約束を破ってしまっただ。」

独り言を言いながら、太吉は鎮守様の方
へ向かっていきました。

地藏の前に座り、太吉は話しかけまし
た。

「ごめんよ、お地藏さん。おいら、お

地藏さんとの約束破ってしまった。と
うとう嘘をついちゃった。またもとの吃
りにもどつちまうんだなあ。しょうがね
えよな、約束を破いちゃったんだか
ら。」

淋しそうに太吉が聞いかけると、あれ
以来一度も口を聞いたことのない地藏が、
太吉に向かい、ゆつくりと話かけてきま
した。

「太吉や、お前は確かに嘘をついた。

だがな、太吉や、嘘というものには二通
りあるのじゃ。自分の立場を守るために
つく嘘と、他人への思いやりのために、
思わずついでしてしまう嘘じゃ。嘘は確かに
いかん。だがおまえは、あのままにして
いると、斉六が庄屋に怒られる。その斉
六に対して、かわいそうだと思った心か
らでた嘘じゃ。嘘をつくことは確かに悪
いことじゃが、それにもまして、おまえ
の友だちを思う気持ちは立派じゃった。

その友だちを思う気持ちを一生忘れるで
ないぞ。」

それだけ言うと、地藏はもとのように
何もいわなくなっていました。

太吉の吃りは、それから元には戻ら
ず、以前と同じ様に、仲間と遊び、相変
わらず、地藏の世話をする毎日でした。

しかし、それ以来、二度と地藏は太吉
に語りかけることはありませんでした。

おわり